そよ風に木の葉がさらさらと鳴り、弧を描きながら舞い落ちていく。湿り気を帯びた空気がその勢いを一つ加えて、いつもより早い散り際を見せていた。秋雨が降り注がれれば、より一層の潔さが生まれる。

「うまくいくといいですね」

リンという慈しむ存在を得て、美紀はまた一回り大きくなった。その声を穏やかな色に変えて、優しげな母性を瞳に映している。階段から吹き上げる風に髪を押さえて、どこか大人びた雰囲気すらあった。

それぞれがお互いを支えるように過ごして、自分に足りない部分を補おうと成長する。そのすべてが良い方向に向いていて、昔を知る小夜は感慨深い気持ちになっていた。

「子供の仲間に入って、前の雪辱を晴らすんですよね。もうあたしたちと知り合って、あと少しで魔奴化さんたちも戻ってくるのに……ああ見えて意外と意地っ張りですよね」

美紀は何度も聞いた理由を思い出してか、くすくすと口元を緩めて笑った。

「そんな理由じゃないと思うわ」

その流れに引かれて溢すように呟き、リンが今まで主張したことを覆す。彼女の勇気に感心して、あえて口にしなかったものを教えた。

「そんな難しい理由なんかじゃなくて、もっと単純な……あの子が心から望んでいるもの。だからこそ、あんなに意地を張っているはずよ」

「もっと単純なものですか……」

「そう。あの子だけじゃない。私や美紀ちゃんも含めて、誰しもが望むような……とっても簡単でわかりやすい願いよ」

雲はまるでこの先の展開を眺めるように留まり、晴れ間は一つとして覗かせなかった。いつもなら爽やかな青さを広げる空も、今は縁遠いものとして記憶の中にだけ存在している。

村の子供は曇り空なんて意に介さず、いつものように遊び回っているだろう。リンも数ある遊び場から見つけ出して、その願いを果たそうとするだろう。人間と変わらない姿で、人間と同じ振る舞いで、人間よりも純粋な気持ちで接するのだろう。

「単純だからこそ、強い願い……」

小夜が念を押したものの、本当に顔を合わすだけで終わるとは思っていない。思うわけがない。

誰かに誘われたりすれば、すぐに心が揺らいでしまうだろう。そのか弱い手が繋がれれば振り解いたりできないだろう。一度始まった遊びは一人の言葉では止まらず、長い時間続いてしまうかもしれない。その時に起こる出来事は誰にも止められない。

さっきの約束の真意は、その先にあった。

「雨、激しくならないといいんだけど……」

雨は、降る。ざあざあと降る大粒の雨が。

小夜は確信にも近い予感を抱きながら、その暗雲が垂れ込める空を見上げていた。

リンは景色の移ろいに目を向けながら山道を歩いていた。

あちこちにある落ち葉をわざと踏みしめて、色んな音を耳で楽しむ。一つとして同じ音はなく、小気味よい音を響かせて崩れていく。

ただ歩くだけでは胸のわくわくが止まらない。地面を踏まないように落ち葉を選んで、ぴょんぴょんと跳びながら踏んでいき、落ち葉の固まりを発見すると、そんな規則を頭の中から押し退けて走り抜ける。

リン一人だからできる遊び。神社にいる二人の前ではできない、子供っぽい遊びだ。

（小夜さん、すごく心配してた……）

ふと足を止めて、リンは神社がある方角に視線を向ける。既に周りの木が邪魔をしているが、見送る際

に垣間見せた表情は忘れられない。どこか自分の母親と被るような物憂げな色を持ち、途中まで後ろ髪が引かれる思いだった。

「やっぱり早かったのかな……」

リンは二人の厚意に甘えている身で、わがままが過ぎたと気落ちする。どんよりと曇る空のように落ち込みかけるが、ぐっと垂れ下がった目尻に力を入れた。

「でも、頑張らないと……頑張って……しないと」

そう呟いていると、落ち葉の上を歩いたおかげで忘れていた緊張が蘇る。

意気揚々と外に飛び出した小兎が、あっという間に臆病風に吹かれる。リンは自分自身をそう例えつつ、それに負けまいとした。

「あれ……」

彼女の耳にかすかな声を入った。

どうやら藪の先から聞こえてくるようだ。

だが、まもなく対面することに思わず逃げ出してしまいそうになる。

(このために修行をお願いしたんだから行かないと……)

リンはその足を踏ん張らせて、声の発生源に近づいていく。

最初は聞き取れなかった声も、距離を縮める内にはっきりと聞こえるようになった。

「へへーん。今度はお前が鬼だからな」

「ずりぃぞ！　飽きたって言ったくせに触んなよ！」

子供たちは鬼ごっこで遊んでいた。天気の悪さなんて何処吹く風と、傍目からも楽しげに映る姿だ。

リンは離れた場所の木の影に隠れて見ていた。遠目に様子を窺っているだけなのに、まるで神社の階段を全力で駆け上がったように胸が早鐘を打つ。

子供と顔を合わせて、二言か三言交わしたら帰る。

ただそれだけのことなのに、今のリンにとっては遥かに高い障害だ。

(早くしないと、どこかに行っちゃう……)

リンはせっかくの機会を失わないためにと、がくがくと震える足に活を入れて踏ん張った。

「あれ？　お前……誰？」

その後ろから聞こえた言葉。いつの間に移動していたのか、子供の声が不意に投げかけられる。

「うひゃう！」

リンは飛び上がらん勢いで素っ頓狂な声を上げた。その勢いで振り向くと、遊んでいた子供の一人が凝視していた。村では見かけない顔なので、どこか不審げな色を含んでいる。

「誰？　お前、村にいないよな？　最近引っ越してきた奴なんていないし……どこの奴？」

「あっ。え、えっと、その……わたしは……」

唐突すぎる遭遇に心構えができるわけもなく、リンはあたふたと戸惑った。何か言わなければいけない状況だが、前もって考えていた台詞も吹き飛んで、頭の中が真っ白になってしまう。恥ずかしいわけでもないのに、何故か彼女の身体が火照っていく。

そんな風に慌てる少女に対して、子供は訝しげな目つきを向ける。他の二人も遊びを中断させて、横並びになるように集まった。

子供たちから一斉に視線を浴びて、リンは言葉を失うばかりだ。子供もひどく緊張しているとわかったのか、こつんと肘を隣の脇腹に当てて、お互いに何かを促そうとしている。

「ほ、ほら、早く言えって」

「ああもう、わかったよ。俺が聞けばいいんだろ」

真ん中で挟まれていた男の子が溜息を漏らして、一歩だけ前に出る。びくんと身体を震わせた彼女を見

て、面倒くさそうに頭を掻いた。
「あー……どこの子？　村じゃ、ないよな？」
さっきまでの荒っぽい言葉使いを控えて、男の子はできるだけ刺激しないような声色で聞いた。その心遣いを感じて、リンも怯えてびくびくする態度を抑えて、返事を頭の中から搾り出す。
「じ、神社に住んでいるんです……ついこの前からですけど……」
その言葉を聞いてか、子供たちの態度が柔らかいものに変わる。
「姉ちゃんたちの所か。そういや、思いっきり怒られてから行かなかったもんな」
「行けなかったんだろ。お前、昨日も母ちゃんと寝ていたんだよな」
「なっ！　か、勝手なこと言うんじゃねえよ！」
図星だったらしく、隣の子供ににやにやとした顔で指摘されて、穏やかな口振りを荒っぽくした。初対面の相手に知られたくなかったのか、小麦色の頬が日焼けしたように赤くなる。
「大体、お前だって一人で厠に行けなくなってるだろ。一つ先の家にいる俺を呼んでまで、毎日つき合わせるなよ」
「あ、あれはお前が怖がって我慢してると思って、俺がわざわざ誘ってやってんだよ。感謝してほしいくらいだぜ」
友達の嘘を嘆くように首を横に振り、大袈裟に溜息を漏らす。それにかちんときたのか、二人がお互いの両手を掴んで取っ組み合いを始めた。がるると唸り声を上げつつ、犬のような威嚇を続けている。
「あ、あの……ケンカはよくないです……」
リンはぐるぐると回る二人にあたふたして、自分なりに精一杯の制止を行う。しかし声が小さかったせいか、そのやり取りは終わらないままだった。
「気にしなくてもいいよ。あれはじゃれ合いみたいなもんだし、毎日しているんだ」

じゃれ合いに参加しなかった一人が話しかけて、落ち込みかけた気持ちを止めた。そう言われて見ると、二人はいつの間にか不敵な笑みを浮かべていた。取っ組み合いが相撲に代わり、豪快な上手投げで勝敗を決める。
「ほ、本当です……ケンカじゃなくてよかった……」
「こいつ、口が軽いからぽろぽろ漏らすんだ。お前も気をつけろよ」
相撲の勝負で負けた子供が服についた落ち葉を払った。身体ごと跳ねて起き上がり、相手を指してリンに忠告する。
いきなり自分が話しかけられると思わなかったため、彼女はどきんとした。あからさまに動揺が顔に出て、こくんこくんと無言で頷く。
「お前もだろ。人のこと言えないくせに、よく言うぜ」
勝利をもぎとり、仁王立ちでふんぞり返る子供も、その口元をへの字に変えて異議を唱えた。二度目の勝負が始まりそうだったが、その前に別の言葉が投げかけられる。
「んで、どうしたんだよ。もしかして道に迷ったのか？　それなら神社まで案内してやるよ」
「あっ。えっと、その……わたしは……」
リンはいきなり話を振られて、反射的に腰を引いた。落ち着きかけた気持ちが揺れて、両手の指先をお互いにくっつけてうねうねさせる。
今回は顔を合わせることが目的。偶然とはいえ、彼女が一方的によく知る子供に会えたことで達成した。
いつもは話を聞くだけだったが、実際に混ざったら嬉しさが込み上げる。この空気に入り込めた事実を噛み締めて、びくびくと物怖じする表面とは裏腹に、心の中では満面の笑顔だった。
（でも、ぼろが出る前に帰らないと危ないよね……）
変化はまだ解けていないものの、いつ失敗するかわからない。突発的な何かが起こって動揺したら終わり

だ。尻尾や耳が出たり、妖狐の姿に戻ったら言い訳のしようがない。
神社が不利益を被るわけにはいかない。
リンはこれ以上一緒にいられないと、子供たちから離れて神社に帰る言い訳を考える。
「名前は？　いつまでもお前じゃ言いにくいし、教えてくれよ」
そこに新たな質問をされて、今はおろおろして一つのことしか処理できない彼女は、言い訳の候補が四散してしまう。
「り、リンです……」
何も喋らないわけにはいかず、素直に自分の名前を口にした。
そのあとすぐに帰ろうと口を開くが、そこに続く言葉が出てこない。
「ふーん。急いで神社に戻ることもないだろ？　今日は皆の集まりが悪くて困っていたんだよ。リンも一緒に遊ぼうぜ」
「えっ……」
予想外の展開に声が漏れる。神社に住んでいるという告白が功を奏したのか、本当なら数回目で誘われる予定だったのに、一足飛びで声をかけられた。
リンは遊びの誘いを聞いて、神社に戻らないといけない気持ちがぐらりと揺れる。がちがちに緊張する反面、そのわくわく感が顔に出る。重ねた手の平を口元に添えて、緩みそうなそれに蓋をした。
（帰らないといけないのに……でも、せっかく誘われたのに……）
二律背反する気持ちを抱えて、彼女はその選択に迷う。頭の中の天秤が左右に揺れて振り切らず。そのつぶらな瞳を潤ませる。
「ほら、早く行こうぜ。とっておきの場所を教えてやるからさ」
子供はその答えが出る前に手を取った。もう待ちきれないといった様子で、ぐいぐいと引っ張って森の

奥に進む。他の二人も続いて、彼女に合わせた速度で歩き出した。
「あっ。でも、わたし……」
リンは慌てて振り解いたりせず、控えめな否定を口にしながらもついていく。自分の天秤が片方に傾いて、この先にある期待感で心が膨らみつつも、二人の巫女に心の中で謝罪を漏らす。
「いいからいいから。面子が足りなくて困っていたんだよ」
「こんな天気だから村の中で我慢しようとか言うんだよな。雨の日に駆け回ったら面白いのにもったいないよな」
空は未だに変化を見せず、どんよりと曇ったままだった。もしも雨が降れば、小雨ではなく豪雨になるだろう。
周りの木はまだ紅葉に彩られているものの、最初に比べるとその密度を薄めている。多少なら雨宿りになりそうだが、雨に打たれる度に紅葉も散ってしまう。豪雨ともなれば、問答無用でずぶ濡れになる。
とても遊ぶには向いていないが、リンは空の薄暗さも気にならない。子供たちの後ろについて控えめな足取りで別の遊び場に向かう。
子供と一緒に遊ぶ。それだけで気持ちが上向いていた。
「あのさ、小夜の姉ちゃんなんだけど……ん？　なんだあれ？」
不意に振り向いた子供が、言葉の途中で不思議そうに声を上げた。リンの後ろに視線を落として、それに釣られて、リンも含めた全員が同じところに目を向ける。
森の中で不釣り合いな白い紙。御札と同程度の大きさで、人形を象っているものだ。
（あれ、小夜さんの紙人形だ……）
彼女が凝視しても微弱な力しか感じ取れないものの、優しく穏やかな波がありありと示している。何の効果なのか気になり、そのまま力の波を探っていると、子供がさっとすくうように手に取った。

「もしかして、小夜姉ちゃんか美紀姉ちゃんの御札じゃね？」
「げっ。もしかして、こんな日に森まで遊びに来た俺たちを捕まえる気とか？」
何度か同じ目に遭っているんだろう。
子供たちは落ち葉の上にあった紙人形を睨んで、その警戒心を露わにする。頭にあたる部分を指で摘んで、まるで腫れ物扱いだ。
「どうする、これ？　置いておくわけにもいかないよな」
「今まで気づかなかったんだぜ。どうせ俺たちにはわからないように隠れていたんだろ。見つけただけでめっけものだって」
紙人形が発する力には攻撃的な波はない。だからといって、リンが口にするわけにはいかず、子供が感じ取れるわけもなかった。
彼女はどうにかして説明しようと考えたものの、それより先に紙人形を摘んでいた子供が手を掛ける。
「あっ……」
びりびりと引き裂かれる紙人形。元の形がわからないぐらいの小ささになり、そこに込められた力も四散した。紙吹雪になった人形は地面に撒かれて、その際に吹いた風にさらわれしまう。
「よーし。これで姉ちゃんには見つからないぞ」
「危なかったよな。リンに遊び場を教えてやるんだし、姉ちゃんに見つかったら大変だよ。また御札を使われたら逃げられないもんな」
もしもの危険を免れてほっとした彼らと違い、リンは紙人形の意味がわからずに終わって、もやもやとしていた。子供に置いていかれないようについていくが、何度も振り返ってしまう。
（多分、監視なんかじゃなくて、わたしを心配して……）
そう感じて、彼女の天秤が再び揺れてしまう。その足取りが重くなって、一度は足を反対方向に変えたものの。
「何やってんだよ。早く行こうぜ」
「は、はい……」
引っ込み思案なリンが断り切れるわけがなく、結局は子供と一緒に遊ぶことになった。後ろ髪を引かれたものの、落ち込んだままで遊んだら失礼だと前向きに考える。
（大丈夫……頃合いを見計らって帰ればいいだけだから……）
修行のおかげで得た小さな自信を振り絞り、彼女はせっかくの機会を生かすためについていく。その顔は緊張に包まれて、口元や目尻がきゅっと締められたものの、心の内に滲み出るわくわく感は止まらない。
どんよりとした空とは正反対の晴れやかさ。点々とした雲は見えるものの、今は自分の念願が叶う喜びで暗雲を払っていた。
しかし、実際の空が晴れ間を覗かせる気配はなく、その深さを増していくばかり。今にも落ち葉を踏みならす音を掻き消すほどの雨が降りそうだが、やんちゃ盛りの子供には関係がないようだ。
暗雲は恵みの雨をもたらす前兆でもあり凶兆である。今回がどちらにあたるかは誰にもわからない。少なくとも、この場にいる者には。
（うん。絶対にバレたりしない……よね？）
リンは心の緩みを自覚しつつ、子供に追いつこうと駆けた。
その先にある、自分の心を満たす何かを得るために。

そこは森の中に広がる憩い場だった。
人為的に作られたのか、自然と生まれた空間なのか、雑草が膝下までの高さを維持して生えている。た

だし、そこには樹木は存在していなかった。
まるで木が避けているようにして、ぐるりと円状に雑草だけの空間が生まれている。かなりの広さがあり、十人で追いかけっこしても森に入る必要はない。獣道や道標も見当たらないため、子供も偶然見つけた遊び場だろう。
獣や大半の人が知らない秘密の空間。
リンは、この土地には多くの妖怪がいると思い出して、妖怪の宴会場という予想に行き着いた。空も晴れていれば、夜には月がよく見える場所だと気づいてある種の確信を得る。
日中ならともかく、子供が時間を守るようには見えない。普通ならみだりに使っていい場所ではないものの、小夜の話を聞いた範囲では例外中の例外といえる。
せいぜい、誰かに化かされて苦手意識が強まるぐらいだろう。彼女としては問題だが、少なくとも、子供はひどい目に遭ったりしないし、小夜もこんな特殊な場所なら逆に把握しているはずだ。
「やっぱり、ここで鬼ごっこしたら楽しいよな。晴れていたら影踏みもできるんだけど……仕方ないか」
「楽しかったけど、少し疲れました……」
そんなことを言いつつ、リンは憩い場での鬼ごっこを満喫していた。全員の体力が尽きるまで追いかけっこを続けた結果、今は隅まで移動して木に寄りかかっている。
秋に加えて、ぶ厚い雲で日差しが遮られているとはいえ、ずっと走り回れば汗が噴き出す。なぜか頬を引きつらせて平然を装っているものの、子供たちも汗だくの顔を袖で拭っていた。
「お前、意外と体力あるんだな。何度も追いつかれたし、やっぱり姉ちゃんの所にいたら体力が鍛えられるのか」
「え？　あ、はい。よく掃除とか手伝っていますから……」
リンも汗を掻いているものの、じんわりと額に滲んでいる程度で、その息も荒くない。多少の気怠さは

あるものの、一見すると疲れたようには見えないだろう。
まがりなりにも妖狐だ。人に変化しても元々の能力が違う以上、圧倒的に優位と言える。その他にも気遣われるところもあったのか、頻繁には追いかけられなかったので疲れる場面が少なかった。
「俺も、小夜姉ちゃんの存在を忘れてた。そうだよな。あの神社に住んでいるんだから鍛えられるよな」
子供たちは両手で服を摘んで、その内側に風を入れるためにばさばさと扇いだ。リンの正体に気づく様子もなく、見た目と不釣り合いな能力の高さは、神社のおかげだと勘違いしている。
（最初は気づかれると思って不安だったけど、全部二人のおかげで助かってる……）
神社が村の人からどう思われているのか気になるが、彼女はその思い違いと運の良さに感謝する。
「次はどうする？　まだ昼にもなっていないのに暗すぎるし、これで雨が降ったら危なくねえか？」
空は子供の不安を際立たせるように薄暗さを増していた。太陽の位置は大まかにわかるものの、もう夜になると言われても違和感がない。最初は強気だった子供たちも、嵐の到来の予感に消沈しているようだ。
「そ、そうだな。父ちゃんや母ちゃんに怒られそうだし、そろそろ帰った方がいいよな？　いいに決まってるよな？」
恐怖を煽る雰囲気に、一人が顔を引きつらせて同意を求めた。
風は一向に吹き止む様子がなく、強弱を織り交ぜて音が変化する。リンの腰帯に巻かれた鈴もちりんちりんと鳴り、まるでこれから起きる出来事に警鐘を鳴らしているようだ。それを耳にしながら、彼女はまたとない好機だと判断する。
「わ、わたしもそう思います。今日はこれでお開きにして、また次の機会に遊んだらいいんじゃないでしょうか……」
妖怪だと気づかれる可能性を常に気にしていたリンは、その問いかけに飛びついた。自分から帰ると口にする勇気や機会がなかったため、これ以上はないと頷く。

「だ、だよな。リンがこんな天気でうろついていたら危ないし、二人が目を皿にして探しそうだから帰ろうぜ」
「んじゃまあ決まりだな。せっかく独占できたのにもったいないけど、帰るとするか」
全員の身体を常に撫でる風が汗を引かせたらしく、すっかり元に戻っていた。子供だけあって体力の回復も早いようで、顔色も名残惜しいものになっていた。
早めに帰る提案もリンの言葉が子供たちの後押しになったのか、立て続けに賛成者が増えていった。彼女は楽しくもあり不安でもあった時間が終わり、何とも言えない充足感を覚える。後で小夜に叱られる覚悟も決めて、いつの間にか不安げに下がった目尻を元に戻した。自分の念願の一つが叶ったことを喜び、ほんのりと頬を赤らめる。
（小夜さんとの約束を破ってしまったけど、皆の誘いを断るよりよかったのかも……）
そんなことを考えて、最後の同意を待った。
その一人も残念がりながら頷いて、山道までの帰路につくと、次に遊ぶ約束をして子供たちと別れる。リンは込み上げる気持ちを漏らしながら神社に戻り、何もかもお見通しだった小夜に叱られる。そこでしょんぼりとしつつ、仕方ないわねと苦笑混じりに許してくれる……。
そんな未来予想図。
だけど、未来はいつでも予想がつかないもの。たとえ神様でも、その先を読み取ったりできない。尾が一本の妖狐には感じることすらできない。
「もう一回だけやろうぜ」
だから、男の子の考え一つも読み取れない。
「最後は鬼ごっこじゃなくて……そう、かくれんぼで遊ぼうぜ。これなら体力関係ないし、リンに負けっぱなしじゃ男として失格だもんな！」

子供は握り拳をぶるぶると震わせて、その瞳に炎を宿らせた。余程負けたことが悔しかったのか、完全に引く様子を見せない。
「え？　あっ、でも……」
予想外の展開に驚いて、リンはどう反応すればいいのか迷う。
「まあ、かくれんぼなら意固地にならない限り、すぐに終わるか」
「ここなら隠れるところも少ないし、鬼ごっこみたいなもんか」
その間に他の子供も考え直してしまい、あっという間に少数派と多数派が入れ替わった。その心変わりを戻す言葉が思いつかず、残る彼女は頷くしかなくなった。
（今まで気づかれなかったんだから大丈夫……っ！）
リンは心の中で自分に言い聞かせて、ひどく高鳴る心臓を落ち着かせようとした。気が緩んだせいか、その不意打ちで全身がぞわぞわと寒気が走り、お尻や耳の辺りが疼いてしまう。
変化が解ける兆候。それに気づいて、さらに心が乱れるものの、あくまでも子供に悟られないように笑顔を崩さない。額から顎に冷や汗が垂れるものの、誰一人として訝しむ様子はなかった。
「俺が全員見つけてやるからな。リンも手加減はなしだからな」
「う、うん。見つからないように頑張る」
やる気満々の男の子に応えて、リンはこくんと頷いた。
その時に再び鈴の音が鳴って子供の注目を浴びる。
「それ、付けていたらバレバレだろ。鬼の俺が預かってやるよ」
「い、いえ。これぐらい握っていたら大丈夫ですから……」
どくんと心臓が脈打つ。嫌な兆候がさらに激しさを増して、取り繕うことができなくなっている。今すぐ駆け出して逃げたいのに、足が固まってどうしようもできない。

憩い場に吹く風と共に、リンの風向きも正反対になり、鈴の音が鳴る間隔も次第に短くなっている。腰帯に巻いた紐が風に揺らされたせいで緩み、今にも解けそうになっていた。

「手加減はいらないって言っただろ。いいから俺に預けておけって」

男の子は次第に青ざめていく彼女には気づかず、鈴を括った紐を掴もうとした。その表情はやる気に満ち溢れて、最後の勝負に賭けているようだった。

ゆっくりと、まるで死に間際に映る景色のような遅さ。小麦色に焼けた手が伸ばされるが、リンには他人事のように傍観していた。

彼女の身体を包むものがひび割れて、修復不可能になる感覚が走る。その破片を元の場所に埋め込もうとするが、崩壊は加速するばかりだった。無理やり抑え付けたものが苦痛を生み出して耐えきれなくなる。

限界が訪れる。自分ではどうしようもできない終わりが近づいて、リンは押し寄せる波にぐっと目を閉じた。そして、男の子が母親からもらった大事な鈴を掴んだ瞬間。

「ダメェッ！」

何かが弾けた。

「うわっ！」

リンの身体がどろんと白煙を吐き出して、突然その周りが不可視のもので包まれた。その煙は彼女にまとわりつくように留まり、吹きすさぶ風にも影響は受けていない。

その内側から漏れ出る妖気は、力を感じ取れない者に寒気を呼び起こして恐怖を与える。

「な、何だ？　何なんだよ、これ……」

子供たちは不意をつかれた出来事に度肝を抜かれたようだ。その拍子に仰け反り、男の子の手に握られた鈴が放られてしまう。草むらに落ちたのか、その音色は響かなかった。

子供たちの顔にあるものは明らかな怯え。周囲が煽るような雰囲気を醸し出しているせいか、不可思議

な怪異から守るようにそれぞれの身を寄せていた。

「え？」

子供の声が何に向けられたものだったのか。

ぽつぽつと降り出した雨が木の葉を揺らして、その勢いは多少の声を掻き消す程に激しくなる。雨粒の多さが視界を狭めて、木がない憩い場の端から端まで見渡せなくなる。

風はびゅうびゅうと唸り声を上げて、草木を揺さぶって騒音の一部に変えた。ざわざわと騒ぎ立てる森は子供を取り囲んでいる。

煙が晴れる。雨に流されるように。風に流されるように。そこにいる子供たちに真実の姿を露わにしていた。

「リンは？　あれ？　でもこれ……」

せめて憩い場にいれば、長く伸びた雑草が覆い隠したんだろう。急いで走り去って、何食わぬ顔で再会する手もあっただろう。

しかし、それはない。

その脇に移動した彼らは落ち葉が降り積もる地面に視線を下ろして、煙の中心で隠れたものを凝視した。

本来は首もとにかかる黄金色の髪を風に流して、とろんと目尻を下げた垂れ目で愛らしさを強調する。そんな愛敬のある少女が立っているはずだった。

「き、狐だよな……？」

子供の視線が集まる先には、怯えて身を震わせる子狐がいた。

妖狐であり、リンでもある真実の姿。激しい動揺で変化が解けて、頭の中がごちゃごちゃになった妖怪だった。

失敗してしまった。

リンの頭はその言葉で埋め尽くされて、他のことが考えられなくなっていた。耳や尻尾がだらりと垂れ下がる反面、心臓は激しく脈打って鼓膜を直接叩いているようだ。小夜の言いつけを守らなかった自分の身勝手さが胸を貫いてさらに激しくなる。

子供たちの視線が痛い。

皆、今の事態を受け止められないのか、雨風に吹かれながらも声を発したりしない。その代わりにべっとりとくっついた視線が、今の感情を雄弁に語っているように見えた。

ざあざあと降りしきる雨は、この場にいる全員の身体を濡らす。それぞれの髪から、体毛から滴る雫は雨ではない別の意味を持っている。空を覆う暗雲よりも、憩い場の空気は重苦しさを与えていた。

「あ、あの……」

どうしようもない沈黙の中、リンは膠着状態に耐えきれなくなって声を出した。誰かに押さえ付けられたように重い首を上げて、残り少ない勇気を振り絞る。

ここは多くの妖怪が身を寄せる土地だ。

もしかしたら、笑い飛ばしてくれるかもしれない。もしかしたら、何でもない顔で接してくれるかもしれない。さっきと同じように接してくれるかもしれない。

そんな泡沫の願いを抱いて、彼女はか細い希望を繋ぐように子供たちの返事を待った。

「よ、妖怪……っ」

しかし、その声がきっかけになり、子供は怯えた声を出した。がさりと雑草を踏みつけながら後ろに下がり、その顔を恐怖で引きつらせる。

リンが話を盗み聞きした時も含めて、子供たちが今まで見せなかったもの。決して自分に向けてもらいたくなかった表情だった。

何よりも明確な拒絶。

（ああ……もうダメなんだ……）
彼らの姿に刻まれた色を感じて、彼女は諦めに近い気持ちを抱いた。残り少ない勇気がすっと消え去り、かくんと頭を落とす。視線の先にあった紅葉が土に汚れて、その彩りを一瞬で失っていた。
雨は激しさを増すばかりで、リンの尻尾が雨露を払うために反射的に揺れる。その際に鈴の音が聞こえず、男の子が投げ捨ててしまったと思い出した。
（お母さまからもらった大事な鈴……でも……）
鈴は雑草が生い茂る憩い場に落ちて、どこにあるのかわからなかった。それを探すためには子供たちの前を通らなければいけない。そんなことをすれば、今の膠着状態が最悪の形で壊れてしまう。
子供が恐怖に震えた声を上げてリンから逃げる。簡単に想像できる絵を思い浮かべて、胸が散り散りばらばらに引き裂かれた。
鈴を無くしてしまったこと。変化が解けてしまったこと。自分の正体に気づかれてしまったこと。小夜との約束を破ってしまったこと。
いくつもの失敗が心を満たして、リンはどうすれば今の状況を打破できるのか、そればかりが頭を過ぎる。次第に自分が何を考えているのかわからなくなり、形にならない思考だけが漂っていた。
（お母さま……わたしは……）
体毛は雨粒を吸い込んで、身体が鉄のように重い。目蓋にも滴ってきて、ぱちりと開けることすら億劫だ。体温も冷たい雨と風がさらい、がくがくと小刻みに震えてしまう。
そう。何もかもが耐えきれなかった。
「ごめんなさい……っ」
リンはその全てを振り払うように身を翻して、その場から走り去る。水をばしゃばしゃと蹴り、泥水を自分の身に浴びながら、目的地を定めずに駆けていく。

その胸に抱いたものは後悔と懺悔。心にこびり付いた暗闇に視界を塞がれて、ただ逃げるしかなかった。
雨は風景にすだれをかけるように降り続けていた。その勢いが弱まる気配は一向になく、暗雲は厚みを増している。まるで夜が訪れたような薄暗さがこの土地を覆っていた。
雨粒が地面を叩く音は一つの風情だが、度が過ぎれば騒音に変わる。全ての音を打ち消す激しさは例外なく、二人の巫女がいる神社にも訪れていた。
「こんな大雨は久しぶりね……」
小夜は社務所の雨覆（あまおお）いの下に立って壁に寄りかかっていた。地面から跳ねる雨粒のせいで袴の下半分が濡れて、上着の白衣も湿気のせいでじめじめとしている。
快適とは無縁の状態だが、彼女は社務所に戻ったりしない。鳥居に悩ましげな視線を向けたまま、遠くの足音一つ聞き取れない五月蠅さに溜息を漏らしている。
小夜は雨が降ってきたため、一度は境内の掃除を止めて社務所に戻っていた。いつまで経ってもリンが戻らないため、心配になって再び外に出ている。
道に迷ったりしなければ、のんびりと歩いても帰り着くはずだ。村の家屋で雨宿りしている可能性はあるものの、変化の熟練度を考えれば望み薄だ。そんな緊張に晒されて耐えきれると思えない。
（何もないと思うんだけど、さっきから嫌な予感がするのよね……）
心の中で呟きながら、小夜は何もないことに疑問が生まれていた。
リンと別れる直前、彼女に気づかれないように、ちょっとした紙人形を貼り付けていた。
効果は貼り付けた相手の感情に反応して、遠くにいる小夜に伝えるもの。変化が解けるような何かが起これば、紙人形が知らせてくる。力を抑えているだけあって他の効果は持たないが、もしもの時に備えた

物だから問題はない。
それがない以上は心配しなくてもいいはずだが、彼女の感覚は逆のことを伝えていた。
「せめて、紙人形がどうなったかわかればいいんだけど、文句を言うわけにはいかないわね」
もしもの事態を考えて、小夜の表情に薄雲がかかって曇る。
何事もないのに探しに行けば、リンが信用されていないと悲しむかもしれない。あの愛らしい姿がその色に染まれば、神社の空気も乱れてしまうだろう。
最初はそう前向きに考えたものの、既に限界は通り過ぎていた。紙人形は何らかの問題が起こったことにして、頭を切り換える。近くに立てかけていた唐傘を手に取り、社務所にいる美紀に事情を話して留守番を頼もうとする。
（あれは……子供、よね？）
絶えず大雨が降る中、小夜は鳥居の向こうに人影を見つけた。雨のすだれではっきりと見えないが、一人の男の子が歩いている。一瞬、リンが帰ってきたと勘違いしたものの、唐傘を開いてその子の元に近づいた。
「どうかしたの？　こんなに大雨なのに何か用事でもあるの？」
自分と子供の間に傘を立てて、彼女は腰を屈めて話しかける。
男の子は全身を雨でびっしょりと濡らしていた。服は雨露を吸い込むだけ吸い込んだのか、ぽたぽたと裾から垂れて止まることがない。村の子供によく見るヤマアラシの髪も、今は濡れネズミになっている。前髪が目蓋にかかっているせいか、その表情は窺えない。
「私、今から大事な用事があるんだけど、急ぎじゃなければ社務所で待っていてくれない？　そのままじゃ風邪を引くわよ」
子供は唐傘の中で足を止めたまま、ぴくりともしなかった。その顔を俯かせて、時折小さく口を動かし

ている。何か放っておけない雰囲気を醸し出して、小夜の足を止めていた。
唐傘を叩く雨が小気味よい音を立てて、周りにいる者の心を静める。彼女自身の焦る気持ちも収めて、秋雨の訪れを味わっていた。
「お、俺……ひどいことしちゃったんだ……」
男の子が顔を上げて、ひどく落ちくぼんだ目を見せた。ぐっと下唇を噛んでいて、そこに複雑な感情を思わせる。ぽつりと漏らした言葉がきっかけになったのか、そのままくし立てるように喋り出す。
「二人は放ってもいいって言ったんだけど、俺は小夜の姉ちゃんに伝えなきゃいけないと思って、一度は村に帰ろうとしたんだけど急いで戻ってきて……それで……それで……」
その勢いは言葉を重ねるごとに失い、最後には雨音に掻き消されるほどの小声になった。再び首が垂れて、きゅっと握り拳に力が入る。
「そう。そういうことだったのね……」
言葉足らずな説明だったものの、小夜は全てを察した上で理解し、自分の懸念が的中したことを知った。過ちを認めて神社まで来た勇士の前髪を掻き上げて、その冷えた頬に手の平を添える。
「胸を張りなさい。君は過ちから逃げるために進んだ道を自分一人で戻った。とても難しいことよ。それ以上自分を責めるのはやめなさい」
視界が狭まるほどの豪雨の中、村に帰ろうとした足を止めて神社までやってきた。人が間違いを起こさない存在でなければ、いつか遠い日に誉められるべきことだ。
男の子は叱られると思っていたのか、月のように淑やかな微笑みを向けられてきょとんとした。その後に冷たかった頬が熱を帯びて、急に恥ずかしそうに身体を固くする。それで元気を取り戻したとわかり、小夜はすっと手を引いた。
「全部、説明してくれるわね？　リンちゃんが君たちとしたこと」

「う、うん……」
こくりと頷いて、子供はリンとのやり取りを説明した。
偶然出会ったこと、森の遊び場で一緒に遊んだこと、妖狐の姿に戻った彼女を目にしたこと、鈴を草むらに投げ捨ててしまったこと。そして、その姿で走り去ったことを。
小夜は出来事の顛末を知り、とても些細だけど大切な願いを持つ妖狐が一喜一憂する姿を思い浮かべる。そこには雨音が鳴り止まぬ中、どこかで自己嫌悪に陥る女の子がいた。
「わざわざ教えてくれてありがとう。助かったわ」
「そんなこと……俺のせいだから当たり前だよ」
「ううん。当たり前のことができたから偉いのよ」
唐傘の内側にいる二人は、お互いの言葉を届かせるように声を張り上げている。その内に男の子は空元気を見せて、にこりと引きつった笑みで強がっていた。
魔奴化や多くの妖怪が遠出して、今この土地には数えられるほどしか妖怪はいない。それでも小さな騒動が巻き起こり、誰かが収めなければいけなくなる。
これは七福神を妖怪から救い出す戦いではなく、妖怪を操る黒マントを倒す戦いでもなく、鬼にさらわれたかぐや姫を救う戦いでもなく、ヤマタノオロチを再び封印する戦いでもない。日本のあちこちに転がっている人間と妖怪の間で起こった問題だ。
(だからこそ、見過ごせない。新しく神社に加わったあの子のために収めなければいけない)
小夜は日常に覗かせるものこそが、真に大切なものだと知っている。その積み重ねこそが、真に大切なものを生み出すと知っている。今が平和だからこそ、一つずつ収めなければいけないことだ。
雨が止み時間が経ち、小さな妖狐が何食わぬ顔で神社に戻る前に見つけ出さないといけない。再び人間と接する勇気を失う前に助けなければいけないものだった。

大地を覆う陰鬱な空は、未だに晴れる気配を見せない。豪雨も瓦や雨戸を叩いて一向に収まる様子がない。どこかにいるであろう、リンの心を沈ませる薄暗さもそのままだった。
「美紀ちゃん、話は聞いたわね」
小夜はすっと立ち上がり、ゆっくりと振り向きながら口を開く。
「もちろんです。リンの話を聞かないわけがありません」
引き戸の音は雨で掻き消されていたものの、水溜まりを踏む足音は聞き逃さない。そこには同じ唐傘を持った美紀がいた。今の状況を把握しているのか、いつもの晴れやかな笑顔ではなく、眉を上げて真剣な色を見せていた。
「お願いがあるんだけどいい？　とっても大事なお願いよ」
「言ってください。あたしもリンのために何かしてあげたいです」
美紀は唐傘を握る手に力を込めて頷いた。考慮する間もない即答を予測しつつも、それを実際に聞いて目尻を下げる。
「妖気を探る修行は積んだわね。この大雨の中で、リンちゃんを見つけられる自信はある？」
「あの子の妖気は叩き込みました。感じ取れる距離に行けば、絶対に見つけ出してみせます」
彼女は自信たっぷりに返事をするが、実際は絶対とまでは言えないだろう。
雨は周囲の気を洗い流す。それが嵐のように激しく降りしきっている状態だ。ただでさえ、リンは妖気の隠蔽が上手いのに痕跡が消えてしまえば、その跡を追えなくなってしまう。美紀が気の質を覚えていても、その有利な条件は豪雨で相殺されている。
確率では物事を計れないが、分の悪さは如何ともし難かい。しかし、小夜は絶対の信頼を以て応えた。
「頼んだわ。私の代わりにあの子の気持ちを支えてあげて」
「は、はい。でも、小夜さんはどうするんですか？」

「私は……今からある失せ物を見つけないといけないの」
鳥居の先にある深く広大な森を指して、小夜は心の奥にある熱い情感を込めた。まだ長いとは言えない時間を一緒に過ごして、美紀と同じように心の内側に入り込んだ愛おしい存在を想いながら呟く。
「その子にとって、とても大事な物を探し出さないといけない。そうじゃないと、きっと私たちが知らない所で泣いてしまう。そんなことを見過ごすわけにはいかないわ。だって……」
この土地を覆う熱い雲はそのままで、地面に打ち付ける大雨もそのままで、黒髪や装束をなびかせる風もそのままで。
「私はあの子の……お姉さんだからね」
何もかも薄暗く重苦しいその中で、小夜は誰もが惹き付けられるような微笑みを、満月の夜に輝く月見草のように美しい姿を垣間見せた。
「小夜さん……」
一瞬だけ全ての音が消え去ったような時間。再びそれが蘇り、美紀は雨風の存在に驚いたような声を出して、自分の手から離れかけた唐傘を握り直した。
「くす……大丈夫？」
「つ、つい見とれただけですから。気にしないでください」
ぶんぶんと手を横に振りながら、美紀はその気遣いを遠慮した。心配した当人も冗談混じりで聞いたため、特に追及もせずに終わる。
「リンちゃんのこと、お願いね。私が失せ物を見つけるまでに捕まえてあげて」
「任せてください。あたしもリンのこと、妹だと思っていますから」
小夜の気持ちに続くようにして、彼女も同じ言葉で応える。
この神社に欠かせなくなった一人の女の子を取り戻すため、二人の巫女の奮闘が始まった。

難波久美／作

奇々怪界　～狐の里入り～

第四章

風は森を巻き込むように乱吹いていた。びっしょりと濡れた落ち葉は地面に積み重なっているが、木から離れる紅葉は生き物のように飛び交い、あちこちに貼り付いては落ちている。

「ここまで降っていると、大して変わらないわね……」

小夜は全身をずぶ濡れになりながら森の中を歩いていた。唐傘は強風で壊れそうだったので折りたたんで、今は手に握られている。そのために装束はすっかり雨を吸い込んで、両肩に重りを乗せた気分だ。布の面積が半端に広い分、ずしりとのし掛かっている。

多少の雨粒は木のおかげで軽減されているが、豪雨ともなれば違いがわからない。視界を塞いだり身体に当たる紅葉が邪魔で、利点を完全に食いつぶしている。

落ち葉のおかげで草履は泥まみれになっていないものの、足袋は濡れているので歩く度にびちゃびちゃと音を立てる。歩きにくさに拍車をかけるが、それでも止まったりしない。

（どれだけ時間がかかるのかわからないから、早く行きたかったんだけど……一人じゃないから仕方ないわね）

小夜は目元を隠す前髪を指先で分けて、後ろの子供に目を向けた。
リンと一緒に遊んだ子供は、彼女と同じように濡れネズミになって歩いていた。
「場所さえ教えてくれれば、わざわざ案内しなくてもよかったのよ」
そう言って促すものの、誰一人として帰る気配を見せない。
この大雨で子供を出歩かせるわけにはいかず、小夜は遠回りだとわかった上で村に寄っていた。その時に残りの二人に会い、リンを拒絶した行為を叱るわけではなく対応の悪さを軽く諭した。
その結果、二人は突然彼女に付いていくと決めて、せっかく帰した男の子も同じ行動を取ってしまった。子供たちの両親もその決意を曲げられなくて、最後には無茶しないようにお願いされる始末だ。
最初は彼らの動きに気を配っていたため、小夜の歩みも予定より遅かった。しかし、いつもなら騒がしい子供が寡黙に進んでいるため、今は比較的楽に付いてこれる歩幅で歩いていた。
「誰に付いていこうが、俺たちの勝手だろ。向こうに忘れ物があったから……ただのついでだよ」
村にいた子供の一人が、道案内を除いた言葉を初めて口にする。豪雨の中を歩いているせいか、声も含めてどことなく不機嫌だ。鬱陶しそうに髪を掻き上げて、ぐっと寄せた眉を見せた。神社に来た男の子より後ろについて、もう一人と横並びでずんずんと歩いている。
「私は行かせたくないんだけどね。急ぎの用事だし、君たちが怪我したら戻らないといけなくなるわ」
「怪我なんてしないって。いいから早く行こうぜ」
子供は雨風に怯む様子がなく、目蓋に当たる雨粒を受けて目を細めていた。時折飛んでくる紅葉を彼女と同じように払い、手の平でささやかな防御策を取っている。勢いはあるものの、少し前まで遊んでいたせいか、どことなく疲労が見え隠れしていた。
「もしも歩けなくなったら言いなさい。雨宿りするような場所はないけど、きっと歩き続けるよりは楽よ」
小夜は子供たちが根を上げないとわかった上で教えた。案の定、誰一人として頷く子供はなく、嬉しい

ような悲しいような想いを抱く。
しばらくの間、黙々と緑が生い茂る森を進んで、一歩ずつ踏みしめながら木と木の間を通り抜ける。いつもなら紅葉の隙間から覗く空も、雨風で散らされてその空間が広くなっている。そこに待ち受けるものは青空ではなく灰色の雲だが、薄暗い空間に僅かながら色が差し込んだ。
全員が雨や紅葉に打たれながら、何度か歩く方向を変えて道なき道を歩いていく。歩数を重ねる事に速度が落ちていくものの、それでも止まることがなかった。
（この先にあるのは確か……ああ、あの宴会場ね）
小夜は子供がどこに連れていくのか気づいた。それと同時に自分がこれからすることに対して、頭が痛くなってしまう。
この先にある空間は、妖怪がこの土地で宴会する際に使う広間だ。おそらく誰かが偶然見つけたもので、何人かが集まってわいわいと遊ぶ目的には適しているだろう。
子供たちがついてきて正解だったかもしれない。
そんなことを思いつつ、彼女は歩調が落ちた子供たちをちらりと後ろに目を走らせた。雨風で体温を奪われているせいもあってか、肩で息をしている。やせ我慢で顔を引き締めているが、相当疲れているんだろう。
「少し休みましょう。こんな所で倒れたりしたら大変よ」
宴会場まであと少し。しかし、小夜は足を止めて休憩を口にした。唐傘を木に立てかけて、重く垂れ下がった袴を持ち上げると、焼け石に水だとわかっていながらも、ぎゅっと絞って重さを取り除く。
「お、おう。小夜の姉ちゃんが言うのなら仕方ないよな」
まさに渡りに船だと、彼らはほっとした表情になった。泥なんてお構いなしで落ち葉の上に腰を下ろして、ぐったりしながら休む。

雨がざあざあと降りしきる中、全員が向かい合いながら円状で木の幹に寄り添った。少しでも打たれないようにもたれて、服を絞ったり髪を整えたりしている。既に濡れていないところがないが、だからと言ってずぶ濡れでいいわけではなかった。

雨は神社の時とは、違う音色を奏でていた。木の幹や枝に当たる雨粒は低く響く音を立てて、逆に落ち葉や紅葉に当たる雨粒は軽く高い音を立てている。

「姉ちゃん」

薄暗い空を仰いで、残り少ない休憩を味わう中、村に戻った子供の一人がぽつりと声を漏らした。小夜がその言葉に反応して視線を前に向けると、さっきまで眉を寄せたしかめ面を変えて、どこか納得のいかない渋い顔を向けていた。

「妖怪を怖がって何が悪いんだ？　怖いものを怖いって言うのは普通だろ？　身体がすくんでなんにもできなくて……何が悪いんだよ」

子供ながら何もできなかったことを後悔しているんだろうか。

誰かではなく、まるで自分に苛立ちをぶつけるような声を出して、ぱしゃんと水たまりに拳をぶつけた。他の二人も同じ気持ちを抱いているのか、小夜をじっと見つめている。

彼女は彼らの想いを受け止めて、その瞳に慈愛の色を宿した。雨に濡れた髪を後ろに流して、質問を投げかけた男の子に微笑みかける。

「リンちゃんは、嫌い？」

「嫌いとかそういうのじゃなくて、あいつは妖怪だろ。妖怪なんだから怖くても当たり前じゃないのかよ」

「ううん。私が聞きたいのはそういうことじゃないわ」

率直な苛立ちとは違い、反対の言葉を口にする子供に対して、首を横に振って否定する。再び雨に打たれながら近づいて、小夜は子供の失敗を諭すように優しげな表情でもう一度問いかける。

「あの子は怖かった？　身の毛がよだつほど怖い妖怪だった？」

「そ、それは……でも……」

迷い子のように不安で揺れる声。目の前の分れ道で立ち止まり、決まり切っていた正解から外れて、間違いを認められない自分に苛立っているようだ。その言葉は詰まり、何も言えなくなっていた。

小夜はその間に含まれた気持ちを汲み取り、全てを受け止めて胸元にたぐり寄せるように抱きしめる。

「人間も色んな姿を持っているわ。髪や肌の色が違う人、違う言葉を持つ人もいる。でも、言葉の違いがあってもそれは同じ人。ただそれだけの違いで、その内側は覗いてみないとわからない。妖怪も同じよ」

雨に濡れたその髪を撫でて、泣きじゃくる赤ん坊をあやすように柔らかな声で話す。子供はその言葉に聞き入るように静まり、誰一人として挟み込む者はいなかった。

「この世界には悪い人間もいれば、良い妖怪もいる。怖い妖怪もいれば、優しい人間もいる。あなたたちには一塊で見てほしくない。難しいことを言っているかもしれないけど、私が知る人には……この土地に住む人たちにはそうなってほしくないの」

数多くの妖怪と戦い、時には協力し合い、幾人もの妖怪に全幅の信頼を置かれている小夜だからこそ言えるもの。リンという妖狐と家族同然に接している巫女だからこそ言えるものだ。

人間と妖怪が手を繋ぎ、お互いの領分を守りながら生きていく。決して全ての人には望めないものの、せめて自分自身が身を置く土地はそうであってほしい。

「だから、あなたたちもそうなってもらいたいかな」

小夜が心の底から願っている思い。その声は雨音にも負けない響きを持って、雨風が吹き荒れる森全体に広がっていた。

雨はまだ止まない。だけど、無節操に吹きすさんでいた風は、大きな懸念を吹き払ったように不思議とその勢いを弱めていた。

「姉ちゃん、ありがと……」
子供は彼女にだけ届く声で感謝の言葉を口にした。胸元から離れて立ち上がり、他の二人の手を引いて休憩を終わらせる。
「早く行こうぜ！　俺、リンに謝らなきゃいけないんだ！」
「ああ。こんなもやもやした気分はまっぴらごめんだよな」
他の二人も同調して、炎が次々と燃え移るように勢いを増す。今までの疲れが嘘のような活力を見せつけて、全力で駆け出しそうなほどだ。
「そう。じゃあ、早くこっちの用事を済ませてないといけないわね」
小夜はその反応に口元を緩めて、切れ長の目を穏やかな色に変えた。額の白布をきゅっと締め直して、自分の身体にまとわりついた疲労を吹き飛ばした。
（この子たちのことは後回しにしようと思ったけど、一緒に連れていって正解だったみたいね……）
自分の見込み違いを反省して、若さ故の間違いと成長の早さに感心した。彼女もその波に乗るために唐傘を握った。
ささやかな休憩は終わりを告げて、目的地に向かうための歩みが再開する。そこにいる若人の姿は、鬱屈とした空気が何一つない晴れやかなものだった。
「でも、どうして向こうに行くんだ？　リンはいないと思うぜ」
「行けばわかるわ。一人じゃ見つけられるかわからないから、あなたたちに手伝ってもらうわね」
「見つけるって……あっ」
小夜の意図に気づいたのか、神社に来た男の子がはっとして、すぐさま納得顔になった。それに不敵な笑みを返して、彼女は歩を進めながら目的地に急ぐ。
誰かが落ち葉を踏みならす度、その下に隠れた水たまりがぱちゃぱちゃと音を立てた。既に首を垂れ下

げようとする豪雨に怯むことなく、まっすぐと前を見据えて進んでいく。まるで道なき道に一本の線が引いてあるような歩みで、誰一人として止まらなかった。
どこまで進んだのだろうか。
木と木の間に映る風景は紅葉に彩られて、雨に降られながらも幻想的な色を保っていた。神社から望む景観も、晴れた日に立ち寄る景色も、大雨の日に陰る風景も、その色を変えるだけで同じものだ。
この土地を包み込む色取り取りの紅葉。夏の終わりと秋の訪れを知らせる象徴。それが一歩踏み出すと共に。
「わっ……」
すっと途切れた。
そこにあるものは、リンと子供が遊んだ宴会場だった。もうもうと生い茂った草むらが広がり、宝物を隠す障害として立ち塞がっている。その広間だけには落ち葉一つなく、草花の影に泥土が見えていた。
宴会場に放り投げられた鈴は、どこにあるのか判断が付かない。その小さからして遠目で見つけられるものではない。土が混ざった水たまりに落ちれば、実際に手で探らなければわからない。
小夜は宝探しが終わった後の姿を想像して、野となれ山となれと、白衣の袖を腕まくりする。後ろに目を見やるが、他の子供たちはむしろわくわくとした様子で目を輝かせていた。
「さあ、宝探しを始めましょうか。あの子の大事な宝物を見つけるためにね」
緑の海に沈み込んだ、たった一粒の宝物。小夜たちは銀に染まる鈴を探し出すために動き出した。
風は勢いを弱めたものの、豪雨は変わりなく続いていた。どんよりとした空はさらに淀みを濃くして、大地に深い影を生み出している。すだれがかかったような視界も同じで、山道を外れて森に入らなければ

逆に歩きにくいほどだ。
「こんなに降っているんじゃ探りようがないじゃない……」
美紀は時間の感覚が狂いそうな空を森から仰いでいた。とうの昔に役に立たない唐傘を折りたたんで、大雨が原因で完全に消えている痕跡に頭を悩ませている。
小夜から離れて少しの時間が経った。彼女は最初こそ意気揚々と始めたものの、すぐに大きな障害にぶつかって手探りで探している。
妖気の痕跡を洗い流す雨はすだれどころか城壁となり、今は収まったものの、強風は集中力を乱す元凶になっていた。
まるで真っ暗闇の迷路に放り込まれて、一つだけ存在する出口を見つけなければいけない状況だ。唯一の好条件は、今この土地にほとんどの妖怪がいないことだろう。
（でも、あたしが見つけてあげないといけない。こんな雨の中、リンを濡らしたままでいさせるもんか）
誰の妖気か判断つかないほどの痕跡しかない中、美紀は必死に意識を研ぎ澄ましていた。束ねた髪はその必要がないほど垂れ下がり、雨粒は頬から顎を絶え間なく伝っている。不快感が上昇するほどの量だが、彼女はぴくりともせずに目蓋を閉じて、外界の情報を遮断していた。
美紀がここしばらくの修行で感じたものを辿り、その迷いが消え去るまで手繰り寄せる。その動きは徒歩より遥かに遅く、少し進むごとに立ち止まって同じ行為を繰り返す。
妖気の探知は今の彼女にとって至難の技。ただでさえ精神力を消耗するものにか細い妖気と大雨が重なり、より困難な試練に変えている。雨に濡れていなかったとしても、外の肌寒さには関係なく、身体が精神的な疲労で汗が滲んでいただろう。
（かなり近くまで来ているはずなのに、ぶつ切りになったみたいに途切れてる……きっとあと少しなのに……）

この近くで一度足を止めて、自分の身から出る妖気を抑えたのかもしれない。自分の正体が知られた動揺で、多少は色濃くあったはずの残滓が薄まり、蜘蛛の糸のように細くなっている。妖気を感じ取ろうとしたものの、薄霧のようにぼんやりとしたものに変わっていた。
美紀は一段上に難易度が高くなった事実に焦りを感じた。髪を束ねた白布を解いて小夜と同じように額に巻くが、その御利益はない。少しの間だけ雨露が目蓋にかからない壁になるが、それも一瞬のこと。紅葉の隙間を縫うように落ちて、彼女の身体を濡らしていく。
悲しみに彩るような暗雲と大雨。まるで子供が泣きじゃくるように降り続けて、この土地を覆っている。誰かを彷彿とさせる空は、美紀の胸を締め付けた。
この迷いの間も、リンは泣いている。雨に打たれたまま、どこかで佇んでいるのだろう。もしかしたら、母親を呼んでいるかもしれない。
そう思うと、苦しい。
気づけなかったのかもしれない。助けられなかったのかもしれない。どうやっても、未然に防げなかったのかもしれない。
運命じみた引力があったとしても、美紀は自分がその場に立ち会えなかったことを悔やんだ。それと共に、激しい熱情を抱いて雨で奪われた体温が蘇る。
（小夜さんに任されたからじゃない。あたしがリンを助けてやりたいんだ。だから、絶対に見つけ出してみせる）
彼女は唐傘を脇に置いて、その姿勢を正しながら印を結ぶ。今一度妖気を探知するため、いつも少なからず明るい色を含む表情を潜めて、目を閉じて眉をすっと引いた。
その身から神気が溢れ出て、小夜と見紛うほどの穏やかさを醸し出した。そのまま修行で叩き込まれた心得を思い出して、一意専心の気持ちで意識を研ぎ澄ませる。

薄霧の中に隠された、たった一つの道標。一瞬でも気を緩めたら消えてしまうものを掴み取ろうとする。

散り散りになっている妖気の欠片は無数にあり、洗い流された上に混ざり合っていた。浮世絵に大量の水が掛けられたように滲んで、元の図がわからなくなるように混濁している。

美紀は眉間に皺を寄せて、予想以上の難しさに下唇を噛んだ。その険しさは一瞬で静まるものの、そこに広がる薄霧が晴れることはない。再び集中力を高めて、リンの居場所を突き止めようとする。

（あの子の泣き顔を変えてあげないといけないのに、どうして見つけられないの。あの子は今も、どこかで膝を抱えているはずなのに……）

その思いが強くなるほど、焦りが生まれて正解が遠ざかってしまう。自分でわかっていても気持ちが抑えきれず、小夜は印を解いて自分の胸を手でぎゅっと握り締めた。

雨は無情にも激しさを増して、吹き止んだ風の分まで担うように降り注いでいた。その一粒一粒が妖狐の残滓をさらに曖昧にして、水たまりの中に溶け込ませていく。

時の重なりと共に消えていく掛け替えのないもの。今そこにある大切なものを掴めないまま、美紀は無力感に襲われていた。

「どうして……こんな時に役に立てなくて……こんな時にあの子を抱きしめてやれなくて、誰がリンの姉代わりなんて言えるのよっ！」

その眼を見開いて空を仰いだまま、重くのし掛かる雲を払うような叫びを上げた。それは空しく虚空を漂うだけで、美紀は大事な女の子を見つけられずに終わる。

「えっ……」

そのはずだった。

突然、吹き止んでいた風が彼女を中心にして巻き起こった。それは何かの意志を持った生き物のように流れて、道標を示すように一つの方向を指している。

美紀がその先に感じたものは妖気。

修行で否という程感じ取り、今は懐かしさすら覚える色を示していた。

「嘘……これって、もしかして……」

不可思議な怪異を目の当たりにして、彼女は息を呑んだ。その瞳は驚きに満ちて、その理解不能な出来事に目を剥いている。緊張のあまり身体が強張っていたが、すっかり脱力している。無力さを刻んだ表情も、思いがけない出来事に喜びが滲み出る。

それが誰によるものか、美紀は些細な問題だと棚上げにした。抑えきれない気持ちを弾けさせて、森の中を突っ切るように駆け出した。

雨が横殴りするように目蓋に当たり、彼女は時折視界を塞がれた。危うく木に激突しそうになりつつも、走る勢いは弱めたりしない。途中で唐傘が木に当たって手から離れるが、振り返りもせずに駆ける。

紅葉蓆を乱し、水たまりを踏んで、泥水を撒き散らしながら。装束の重さを身体に纏わせて、走る度に乱れる髪をそのままにして、息も絶え絶えになりながらその呼吸を荒くして。

草履や袴の裾を泥だらけにさせながら、美紀はリンを見つけ出すためだけに一心不乱に前に進む。

「も、もうすぐそこに……急がなきゃ……っ」

妖気は少しずつその色を濃くして、ぼやけていた薄霧がはっきりとした形になった。残る体力の全てを振り絞り、力が入らなくて崩れそうな足を踏ん張って走った。ぐっと歯を噛み締めて、目の前にある木に手を添えて、少しでも勢いづけるように自分の身体を押す。

その顔には疲労が色濃く刻まれて、時折膝ががくがくと揺れた。誰も見ていないのに、やせ我慢で引きつった笑みを浮かべて、袴を抱えた膝を手の平で叩いて気合を入れる。

美紀を導く風と、森の中に鳴り響く雨音と、彼女が立てる二つの音。それらが混ざり合い、体力が尽きるまでずっと流れるように思えた。

「あっ……」
風が、雨に濡れた身体を忘れさせるほどの温もりが、美紀の身体を一瞬だけ包み込んだ。まるで自分の役目を終えたように消えていき、その目の前に広がっていたものは、他と変わらない森の断片。
そして――。
「美紀、さん……」
木の影に隠れるように膝を抱えて座るリンだった。誰かに捨てられた子猫のように落ち込ませて、不完全な変化で尻尾を出して垂れ下げている。他の者と同じくずぶ濡れになり、いつもは黄金色に輝く髪も、その色を失って肌に貼り付いている。
予期せぬ人物が現れて驚いたのか、彼女の瞳は戸惑いに揺れている。だが、その直前まで宿していた色は、誰の目にも見て取れる深い悲しみだった。
リンは瞳の色のまま、身を寄せていた木から離れた。そのまま何も言わずに逃げようとすると、その身体は美紀の手でふわりと包まれた。
「つーかまえた」
そんな軽い口調で喜びを表して、その悲しげな背中に両手を回した。雨に濡れたまま、でも少し温かい体温を伝えるためにぎゅっと抱きしめる。込み上げる感情を抑えるものの、自然とその力は入っていた。
「ずっと探していたんだからね。こんなに雨が降っているんだから帰らないとダメじゃない」
美紀は自分の子供を慰めるように優しげな色を含んでいた。リンが見つかったことを心の底から安堵して、すっかり冷えた身体を温めてあげようと密着する。
「帰ろう。小夜さんも神社で待っているはずだから、みんな一緒に温かいお風呂に入って嫌なことなんて忘れちゃおう」
雨音に掻き消されないように耳元で話して、彼女は春の日差しに似た微笑みを浮かべた。こつんと頭を

当てて、お互いのこめかみもくっつけて、その心を癒す穏やかな空気を味わう。
ひらひらと紅葉が舞い落ちる中、リンは首を小さく横に振った。
「ダメなんです……」
今にも泣きじゃくりそうな声。初めて会った時よりも声色を沈めて、雪人形のように儚く弱々しい姿を見せる。
「もうここにはいられません……美紀さんや小夜さんと一緒にいたらいけないんです……」
「どうして？　あたしたちのこと、嫌いになった？　それともこの土地が肌に合わなかった？」
そう問いかけると、リンは顔を俯かせたまま、ぶんぶんと首を振りながら否定する。
「わたし、村の人に妖怪だって知られてしまいました……神社で住んでいることも話して……これ以上ここにいたら迷惑をかけてしまいます……だからダメなんです……」
だらりと垂らしていた手が服を握り締めて、その間をすり抜けるようにぽたぽたと雨露が落ちる。それに呼応するように、誰よりも優しくて気弱な妖狐は、ぽつりぽつりと理由を話した。
「二人の厚意に甘えてばかりで、我が侭が過ぎたわたしが悪いんです……幸せ過ぎて大事なことを忘れたわたしが……だから、新しい土地を探そうと思います……そうすればきっと迷惑かかりません……」
リンの心の内に溜まった悲しみを示すように雨は降り、二人の身体に打ち付けていた。その一粒一粒が体温を奪って、真冬の風にさらされたような冷たさになる。
自分のためではなく、二人のために離れるという心遣い。その慈しむべき姿に相応しい振る舞いで、それ故に深い悲しみに彩られていた。
「だから、さよならです……今までありがとうございました……」
自分を包み込む抱擁から離れようと、彼女は誰もが振り向く愛らしさをぎこちないものに変えた。泥だらけの草履と足袋を地面から離して、そこから一歩踏み出そうとする。

「何だ。そんなことだったんだ」
しかし、美紀の抱擁はより強く温かなものになった。リンを逃すまいと包み込んで、その理由を聞いてようやく人心地がつく。
「大丈夫。リンは、此処に居てもいいんだよ。あなたが思うだけ、あなたが願うだけ、あたしたちと一緒に居てもいいんだよ」
「で、でも、わたしがいたら迷惑をかけて……」
リンの声が揺らいだ。心から自分を望まれた言葉を聞いてか、悲哀に染まる瞳に喜びが含まれて、複雑な色合いを見せる。まだ受け入れられないのか、その揺らぎを打ち消すように否定を投げかけている。
その目尻を伝う涙に似た雨露が伝い、美紀はすっと指先で拭い取る。
涙を流した証拠でもある赤く腫れた目を露わにした。
「ううん。そんなことない」
その胸に沸いた庇護欲を抑えることなく、彼女は冷たくなったリンの手を取り、自分の両手で包み込むように握った。
「人と妖怪が手を繋ぎ合って、お互いの気持ちを通じ合う。たまに誤解やすれ違いがあるかもしれないけど、すぐに謝って仲直りする。ここはね、リンが思うより温かい場所なんだよ」
美紀が小夜の元で過ごすようになって生まれた想い。彼女の周りに取り巻く穏やかで、それでいて温もりに溢れた人柄を感じて、共に生きてきた末で形作られたもの。
「失敗なんて後で取り戻せばいい。リンは知らないと思うけど、あたしも最初は失敗ばかりだったんだよ。第一、本当に嫌われたかどうかもわからないじゃない」
そう。ここは、優しさで彩られている。
「だから、あたしたちの家に帰ろう。小夜さんもあたしも……リンとお別れなんてしたくないんだよ？」

難解さなんてどこにもない単純な理由。心からの本音を口にして、自分の妹弟子を引き寄せるため、晴れ間から差し込む日差しのようにこやかな笑顔を見せた。

「ほ、本当にいてもいいんですか……？　わたし、美紀さんたちと一緒にいていいんですか……？」

リンは苦しそうに眉間を寄せて、黄金色の瞳を潤ませて、何かを耐えるような表情で声を震わせる。それは少しずつ、ほんの少しずつ、しゃくり上げるものに変わる。

雨露とは別の何かが目尻から伝わって、ぽちゃりと落ち葉に当たる。雑音は美紀の元に何一つ届かず、ぼろぼろと泣きじゃくる女の子をもう一度抱きしめた。

「うん。いいんだよ。ずっと一緒にいていいんだよ。ずっと一緒にいて、ほしいんだよ」

凍った心を溶かす慈愛。

リンの泣き声が森の中に響き、その時雨は胸に溜めた悲哀を氷解するように流して、水たまりの中に沈めていく。その一つ一つを受け止めながら、美紀は雨が止むまで待ち続けた。

「帰ろう。小夜さんが待ち疲れる前にね」

「はい……っ」

二人は手を繋いで空を仰ぐ。

そこには顔を打つ雨はなく、厚い雲が空を覆っているだけだった。

「これ、いつ風邪を引いてもおかしくないよね。ああもう、びしょびしょで気持ち悪い……」

美紀は袴を指で摘んで持ち上げながら、神社に繋がる山道を歩いていた。雨が降っていた時は気にならなかった濡れ具合が不快感を加えて、その重さに辟易する気持ちを表に出す。足袋も濡れているだけならともかく、泥水が染み込んで指の間にざらざらとした感覚があった。

「神社に戻れば、湯浴みができますからそこまで我慢です」

「そのつもりなんだけど、まだ道は長いんだよねぇ……」

彼女の隣にいるリンは、途中で回収した唐傘を両手で抱くように持って、てくてくと歩く速度を合わせていた。目の辺りは腫れたままだが、その目尻を下げていつもの愛らしさを見せている。歩幅が違うためか、少しずつ距離が空いては駆けて、ぴたりと横に並んでいた。

山道は大雨に降られて、あちこちに大小の水たまりをつくっていた。その大半が泥水と化しており、いくつも落葉船を浮かべている。もちろん、光を反射して雨の終わりを知らせることもなく、鬱屈とした雲は空を覆ったままだった。

さらに森は多くの紅葉を散らして、複雑に混ざり合う数色の葉の密度を減らしていた。あちこちに落ち葉を分け与えて、目に入らないところは見つからなかった。

その中から聞こえる動物たちの鳴き声は、まもなく晴れる空を教えているのかもしれない。

美紀が会話の内容を聞き取れることもなく、リンと一緒に水たまりを避けたり飛んだりしながら進む。少し前の落ち込みはどこかに消えて、何でもないやり取りを謳歌しているようだった。

「でも、本当に今日みたいに接してくれるんでしょうか？　わたしが妖怪だってわかっているのに……」

「あいつらのことだから気まずそうな顔で謝るわね。保証する」

「そうだといいんですけど……」

まだ子供と会う勇気は足りないのか、リンは不安げな声を含んだ。胸に抱いた唐傘をぎゅっと握り、その口元を真一文字に結ぶ。美紀が彼女の濡れた髪を軽く整えると、すぐにその色を潜めて和やかになった。

彼女は残り二人の子供に会っていないため、全員の心情までは読み取れない。だが、小夜が取るはずの行動から言葉通りの確証を持ち、自信たっぷりに微笑みかけた。それで元の空気を取り戻して、二人は行きと違って道なりに歩いていく。

「そう言えば、小夜さんはどこに行ったんでしょうか？　美紀さんの話だと、神社にはいないんですよね？」
「あー、うん。そのことだけど……」
予想通りの問いかけに対して、美紀はどう返事すればいいのか迷った。リンの懸念を早く取り除きたいと思う反面、必要以上に期待させるわけにもいかない。
「あの、わからなかったら別にいいんですけど……」
「ううん。そういうわけじゃないんだけどね」
どう言えばいいのか悩んでいると、唐突に森の中からがさがさという音が聞こえた。いくつか重なった足音に動物的なものを感じず、リンの前に立って目を向けると、そこには見慣れた姿があった。
「やっと追いついたわ。神社に着く前に間に合ったわね」
森の中から出てきたのは、小夜と子供たち。それぞれが色濃い疲労を感じさせているものの、二人が注目した部分は別だった。
「小夜さん、それどうしたんですか？」
「んー、ちょっとね。苦労の証みたいなものよ」
泥まみれの装束。まるで田植えをした後のように真っ茶色に染めて、足袋を含めてひどい有様だ。片腕は泥を落としたように綺麗だが、反対側の腕と両足はまるで漬かったようで、顔にも点々とついている。せめてもの救いと、白布で髪を括り付けて肩にかけているため、その被害は他と比べて少ない。その顔から疲労を滲ませているが、どこか達成感も見え隠れしていた。
そして子供は無頓着を丸出しで、顔以外を泥まみれにしていた。雨に降られて多少は洗い流されたようだが、その姿は親の拳骨が確定しているだろう。身体から泥臭さが漂っているにも関わらず、全員が憑き物が落ちたようにからっとした表情だった。

「だ、大丈夫なんですか？　もしかして怪我をしているんじゃ……」
「平気よ。心配してくれてありがとう」
リンは子供たちがいた事実よりも、その状態に驚いて小走りで駆け寄っていた。彼女らしい気遣いに喜んだのか、小夜は膝を折りたたんで同じ目線で口元を緩める。
「リンちゃん、実はあなたに渡したい物があるの。よかったら受け取ってくれる？」
ちょこんと首を傾げて、彼女は柔らかな声色で問いかけた。泥で汚れていながらも、薄霧から月光を差し込むように美しさは変わらない。
なぜか後ろにいる子供は緊張しているようで、いつもの騒がしさを潜めて二人のやり取りを眺めていた。
「え？　は、はい。もちろんです」
「よかった。後ろにいる子供たちと一緒に探した物だから、断られたらどうしようかって思ったわ」
小夜はにこりと口元を手で隠して笑う。そして、その汚れていない方で拳を握ったまま、すっとリンに差し出した。
「あなたの大切な物、渡すわね」
ちりん。
リンが広げた手の平で鳴る澄んだ音色。身につけた者の凶事を防ぎ、周囲の穢れを祓う神聖なる祭具。憩い場で無くしてしまった鈴が元のままの形で置かれていた。
母親の贈り物を受け取った彼女は、自分の手にあるそれを見つめて、まるで他人事のように呆然としていた。鈴の音がそよ風に揺らされて鳴り、そこで初めて瞳を揺らした。ぎゅっと握り締めて胸元に手繰り寄せると、喜びに満ち溢れた顔を上げて、その黄金色の瞳を輝かせる。
「こ、これ……見つけてくれたんですか？　わたしのために？」
「ええ。泥を被っていたから雨で流したけど……元の音色のまま、どこもおかしくなっていないわ」

ちらりと美紀に視線を合わせて、何とか見つけられたと意思疎通してくる。彼女もそれを返して、お互いの成功に肩を撫で下ろした。

「この子たちも手伝ってくれたのよ。見ればわかると思うけどね」

小夜が後ろを見やると、そこで子供がおずおずと前に出た。まだ怯えの色があるリンに気づいて居心地が悪そうに頭を掻きつつも、彼らは口を開く。

「怖がったりして……ごめん。いきなりだったから驚いたんだ」

「えっ……」

きっとリンが予想していなかった言葉。

彼女は素直な謝罪を耳にして、気が抜けたような声を出す。きょとんとした顔で、完全に理解していないようだった。

「また一緒に遊ぼうぜ。今度は俺たちが神社に行くからよ」

「他にも遊び場はいっぱいあるんだ。全部案内してやるからな」

リンは次々と投げかけられる言葉にぽかんとしていたが、急に誰かに説明を求めるように視線を泳がせる。それは傍にいる美紀で止まり、彼女もまた見つめ返した。

「応えてあげないの？　せっかく誘ってくれているんじゃない」

「で、でも、わたしは妖怪で……人に怖がられるような存在で……だから……だから……」

「うん。でも、ここにいる子は違う。違う目でリンを見てる」

子供たちの瞳に映る色は同じものを見せていた。どこまでも真っ直ぐな瞳で、気恥ずかしそうに笑ったり、仏頂面でそっぽを向いたり、緊張して固まっていたりと、それぞれの装いを見せる。

だけど、その内に秘めたものは共通している。

「わかる？　この子たちは、リンと友達になりたいのよ」

「友達……わたしと、友達に……」

雲が切れ、晴れ間を覗かせて、その日差しが降り注ぐ。長く降り続けた秋雨が終わりを告げて、一つの区切りを付ける。

リンの迷いを断ち切ったように、心の奥底にある願いを引き出したように、くしゃくしゃの泣き顔を満面の笑みに変えた。

美紀が思う、リンのささやかな願い。心の底から望んでいる、ほんのちょっぴり贅沢な願い。でも寂しがり屋の女の子にはぴったりの願い。　どうにかして叶えてあげたくなる願いの結果が、今ここにあった。

「わたしこそ……どうか、よろしくお願いします……っ」

季節は秋。

紅葉が落ち葉に変わり、夏とは違う肌寒い雨を降らす時。

夜には肌寒さを覚えて、早朝まで人肌に包まれていたくなる時。

巫女装束も冬に向けて上着を棚から出して、森が完全に葉を落とす頃には一日中羽織るようになる。

秋らしい秋が訪れて、しばらくの間は降る秋雨に溜息を漏らす時期がそこにある。

とは言え、雨ばかりが秋の装いではない。今は点々とした雲があるだけで、爽やかに澄みきった空が広がっていた。

「風情とわかっていても、どうせなら一気に落ちてほしいわね」

小夜は日を置く度に色を変える風景を神社から眺めつつ、やっとのことで乾いた地面に竹箒を走らせていた。日課の掃き掃除に勤しむものの、朝餉を取ったばかりということもあって動きは緩慢だった。

（本当、慣れないことをするものじゃないわね……）

久しぶりに都まで遠出をしたせいで、身体中が悲鳴を上げている。日を空けてもう一度出向かないといけないが、その際の苦労は想像力と一緒に頭の隅まで寄せておいた。

境内はいつものように落ち葉が降り積もり、飽きるぐらいの彩りを広げていた。たまには休みを取ればいいのに律儀に落ちて、竹箒に払われる時を今か今かと待っているようだ。

何もかもが平常運行だ。秋雨の時に起こった騒動が嘘のように穏やかな時間が流れている。もちろん、全てが変わらないわけではなく、いくつかの変化が生まれていた。

「今日は二人一緒に行くの？」

がらがらと引き戸が開いて、美紀とリンが社務所から出てきた。

普段と同じ着物を身につけている。

「あたしは村に行くので、ついでですけど……ふわぁ～……」

美紀は白布で束ねた子馬の尻尾を頭と一緒に振っていた。まだ完全に眠気が覚めていないのか、目蓋は半分閉じていて、その山間から朝日を覗かせているようだ。前髪の跳ねが気になるようで、くるくると指先に絡めて遊んでいる。

「でも、美紀さんと途中まで一緒だから嬉しいです」

リンも自分の気持ちを表すように尻尾をぱたぱたと振った。とことこと石畳を歩いて、朝から元気な姿を見せている。八の字を描くように二人の間で周り、ちりんちりんと澄んだ鈴の音を響かせながら、小夜をほんわかとした気持ちにさせた。

美紀はまた一つ成長して、リンは神社の家族として加わった。ほんの少しの変化かもしれないが、その積み重ねが大きなものになっていく。そして彼女もまた、自分の変化を心地良く受け止めていた。

「遊びに行くのはいいけど、その尻尾を隠さないといけないわよ」

「はい。でも、みんながそのままでいいって言ってくれたので、今日はこのままにしておきます」

リンは尻尾を隠した完全な変化に慣れていないため、ちょっとしたことで狐に戻ってしまう。今の状態が一番安定するので、普段は尻尾を出したままにしている。現在も修行を継続しているが、尻尾を出さなくて良くなったらそれはそれで寂しくなる。

「この前、女の子とも仲良くなったみたいですよ。男友達ばかりじゃどうかなーと思ったんですけど、これで一安心です」

「そう。じゃあ今度、その子を連れて来るといいわ。大事なお友達だから、茶菓子でも用意して持て成してあげる」

リンを結ぶ輪は着実に増えている。魔奴化たちが戻ってくれば、その輪は一気に広がるだろう。色んな妖怪に歓迎されたり弄られたりする彼女を想像して、小夜は笑みをこぼす。

「昼餉には一度戻ってきなさい。くれぐれも怪我をしたり、森で迷ったりしないようにね」

外に出かける二人を見送るため、彼女は竹箒を脇に抱えて、まるで母親のように念を押した。

「大丈夫です。あたしが帰りに様子を見に行きますから

「くす……それなら安心ね」

「はい。リンがお腹を空かせているのに引っ張り回しているようなら、お尻を引っ叩いてやります」

美紀は胸の前で拳を握り、びしっと前に突き出す。修行の疲れは何のそのと、いつもと同じく太陽のように溌剌とした笑顔を浮かべた。その手をリンと繋いで、鳥居の向こうに行こうとする。

「あっ。すいません。少し待ってください」

そのまま一緒に階段を下りようとした彼女は、何か用事を思い出したように足を止めた。身を翻して境内に戻ると、小夜の前に立つ。

「どうかしたの？　何か忘れ物？」

「あ、あの……ありがとうございました」

そして深々と頭を下げて、その背筋を斜めにした。尻尾は跳ねるわけでも垂れるわけでもなく、くるりと丸めている。小夜から表情は見えないが、真摯な気持ちは伝わってきた。

「今までのことも、その……これからのことも、全部ひっくるめて、本当にありがとうございます」

「うん。でも、気にしなくてもいいのよ」

彼女は穏やかな気持ちを抱き、その頭を上げさせた。和人形のように愛らしい姿を目にしつつ、前髪で隠れた顔を指先で退けて露わにする。

「リンちゃんはリンちゃんのまま、好きなだけ此処に居なさい。それがきっと、あなたにとっても、私たちにとっても一番良いことよ」

「はい。今日は日が完全に上がる前に帰ります。わたし、小夜さんのお手伝いもしたいですから」

「待っているわ。ほら、早く行ってらっしゃい」

リンはその言葉で弾かれるように走り、階段で待つ美紀の元まで急いだ。二人で手を繋いだまま、お互いの歩調に合わすように下りていく。仲の良い姉妹のようなやり取りで、それは小夜の瞳で捉えられなくなるまで続いた。

（身体を汚して帰ってきそうだから、湯浴みできるように用意してあげないといけないわね）

風景に同化した二人から視線を外すと、彼女は鳥居に肩を預けて涼しい朝風を感じた。目蓋に差し込む光で猫目をさらに細くさせて、新しい一日の訪れを堪能する。掃き掃除を忘れたくなるほどの心地よさだったが、すぐに思い直した。

「大変だけど、怠けるわけにもいかないわね」

小夜は自分に気合を入れるため、くるりと竹箒を縦に回して境内に目を向けた。掃除の手順を考えながら落ち葉の排除を始めようとして。

「で、誰だか知らないけど、いつまで隠れているの？」

彼女は腰を折る来訪に溜息を漏らして、虚空に向けて話しかける。

二人が神社からいなくなった途端に出てきた妖気。その呼びかけに応じるように風が渦巻いて、そこから上品なお香の匂いが漂う。途中まで終わらせた落ち葉が散る様を目にして、小夜は掃き掃除を済ませるまで待つべきだったと反省する。

風が取り巻き、落ち葉がその中心を隠すように密度を厚くする。そのどこかで見たような竜巻は、そこから漏れた言葉と共に収まった。

「やはり、お前には敵わぬな」

参道に立っていたのは、一人の女性。一国を収める姫のように煌びやかな和服を着込んで、それには決して見劣らない美しい容貌を焼き付ける。小夜以上に伸びた長髪は朝日に照らされて、きらきらと黄金色を際立たせて、その魅惑的な姿に神々しさを加える。

そして何よりも特徴的である、臀部の九尾。彼女を九尾の狐だと知らしめて、その中に秘めた巨大な妖気を垣間見せた。

「久しぶりであるな、小夜。人の姿で会ってはおらぬが、よもや忘れたとは言わせぬぞ」

女性の瞳はどこか親しげな色を含んでいた。流し目ひとつで男を虜にする艶やかさを併せ持ち、責めるような口振りで話しかける。

小夜は霊感のない人が腰を抜かすほどの妖気を涼しげに流して、眉間に皺を寄せながら小首を傾けた。感知したことがある妖気と九尾の狐を重ね合わせて、ぴたりと当たる人物が頭に浮かぶ。

「あんた……もしかして、魔尾狐（まびこん）なの？」

彼女は七福神を救出する戦いで、魔奴化の前に立ち塞がった狐を思い出した。その答えは正解だったらしく、さも当然といった誇らかな笑みを浮かべる。

「うむ。何やら知らぬ巫女が加わっておるが、主の逞しさは変わらぬようで何よりだ。そうでなくてはい

かん」
「せめて健やかと言ってほしいわね。逞しいとか男じゃないんだから。こう見えても乙女のつもりよ」
「乙女のぉ……」
そう言い、ちらりと身体の一部分に視線を向ける。
「確かに乙女ではあるな。何一つ変わっておらぬ」
「あ、あのね……久しぶりに会ったと思えば、人の成長具合を調べに来たの？　それ、悪趣味よ」
小夜は竹箒の先に自分の顎を置いて、呆れ顔でじっと見つめた。何となく相手が訪ねた理由を察しつつ、話を続ける。
「その通りではある。人ではないがな」
魔尾狐は足音も立てずに鳥居まで歩を進めた。階段から吹き上げる風に長髪をなびかせて、紅葉が散り乱れる森を見下ろす。その先には小夜が捉えられない何かがあるように思えた。
自分の身に宿した優美さだけではなく、包み込むような温かさを持つ母性を滲ませた。黄金色を持つ狐目が口元の緩みと共に柔らかくなり、もう一つの顔を表に出す。
「もう気づいたと思うが、リンは我の愛子(まなご)だ」
「そう。やっぱりね」
小夜は妖気の酷似と魔尾狐と同じ黄金色で腑に落ちる。姿を見せた時機を合わせれば、気づかない方がおかしい。二人の顔立ちや雰囲気は正反対だが、重ねてみるとどことなく面影があった。
「我の過保護が過ぎて、あのように気が弱くてな。人間だけではなく、妖怪にも及び腰になる有様だ。リンも我の懸念に気づいたようでな、自ら独り立ちを申し出たのだ」
誇らしそうに語る姿はいかにも母親らしく、寂しそうに不安そうに眺める様は、リンに対する愛情の深さを思わせる。

小夜はこの土地で全く見かけなかった理由を知り、新たな生命の息吹を喜ぶ反面、時の流れを感じずにはいられなかった。
「大事な娘が独り立ちしたのはいいものの、母親はいてもたってもいられなくなって、ここまで追いかけたわけね。大宴会はほとんどの妖怪が参加するって聞いたけど……行かなくてもよかったの？」
「子を憂わぬ母は居らぬ。人間もそうであろう？」
大小問わず誰しもが持つ母性を言葉にして、九尾の狐は当然のように問いかけた。心弱き人間より遥かに慈しみに満ちた口振りで、彼女が纏う風も優しく流れていた。
「ずっとこの土地にいたの？」
「そう度々ではない。暇を見つけて覗いている程度だ。多少、人捜しをしている巫女に手を貸しはしたがな」
美紀の話を聞いている小夜は、その話で彼女を導いた風が誰によるものだったか知る。泰然と構えるその裏で、お節介で心配性な一面があると思うと微笑ましい。
不意に沈黙が訪れて、風や木の葉のざわめきが神社に流れる。落ち葉はかさかさと鳴りながら風情を醸し出して、そよ風に揺らされる度に階段を数段ずつ下りていく。その中で一葉だけ風を巻き込みながら上がる落ち葉があった。
「リンは立派にやっているのか？　主から見て成長しているのか？」
小夜が自分の近くにいる誰かと落ち葉を被らせていると、今まで風景に目を落としていた魔尾狐が横を向いた。どこか不安げな色を含めて、姉代わりを担う巫女の答えを待つ。
「ええ。あんなに一生懸命な子が成長しないわけないでしょ」
「そうか……なら良い……ならば良い……」
愛子が自分の手から離れて心配だったのだろう。
小夜から太鼓判を押されて、彼女は胸の不安が掻き消されたように微笑んだ。凛々しさすらある表情が

穏やかな色で染まり、それを強調する眉や目尻を下げる。
「我が子が世話になる。主が疎まぬ間は置いてやってほしい」
以前戦った相手に見えないほど、殊勝な態度。すぐに魔奴化も同じだと気づいて、小夜は自分の記憶力に苦笑いした。
「この前、都まで行ってリンちゃんの巫女装束を仕立ててもらうように頼んだのよね。だから返してと言われる方が困るわ」
そう軽い口調で意を伝えて、装束が仕立て終わるまで内緒で進めているものを教える。それを聞いてか、魔尾狐は安堵したようだった。
「でもまあ、たまに差し入れがあれば喜ぶわね」
「ん？　あの樽はどうしたのだ？　随分と前の話だが、ここに酒樽を一つ置いていったはずだがな」
「あれ、魔尾狐が持ってきた物だったのね……」
謎の置物だった樽が本物だと知り、小夜は意気消沈する。指先を階段の下に向けると、何となく彼女も察したらしく、くすくすと笑った。
「まあ良い。次に来た時にまた持ってこよう」
再会の約束。
小夜はリンが立派な妖怪になった時、この土地に子離れができない妖狐が加わる予感を覚えていた。
「リンをよろしくな」
魔尾狐は軽く地面を踏むと、まるで体重が存在しないようにふわりと浮いた。階段の上で漂って、くるりとその身を翻す。
「そう言えば、あの鈴はどこで手に入れたの？　使い込んでる割には神気が消えていないし、名付けの元でもあるんでしょ？」

「覚えておらぬのか？」
その姿がゆっくりと風景に溶け込んでいく中、九尾の狐は呆れたような笑みを浮かべる。
「主の大幣（おおぬさ）から落ちた鈴を頂戴した。つまり、主が間接的な名付け親でもあるな」
小夜は気恥ずかしさを覚えて顔が赤くなり、もう一度竹箒を回してそれを隠した。
「ふふ……また会おう。次はゆるりとな」
名残惜しそうにお香の匂いを残して、その姿を消した。妖気の気配も完全に消えて、神社は再び小夜一人になる。
「これで一段落ね……」
リンの来訪から始まる最初の騒動が終わり、彼女は空を仰いだ。
青々とした色。凶兆を示す暗雲は消え去り、日本を巻き込む出来事が起こる気配もない。どこにでも転がっている日常であり、小夜が求める最上の日々だ。
彼女はいつもと変わらない平和に幸せを感じながら竹箒を持った。毎日のお務めである掃き掃除を始めるため、境内に散らばる落ち葉を掻き集めておく。
森の生き物が挨拶を交わして、お務めの邪魔をしたり手伝ったり、村の人が差し入れを持ってくる。ここに妖怪が加われば元通りだ。
その日もまもなくやってくる。
魔奴化たちと再会する日を心待ちにしつつ、七福神に使える巫女は神様の通り道に箒を走らせた。
「本当、平和よねぇ……」

完

あとがき

初めての方は初めまして。自分の名前を知っている方は手に取っていただき、誠にありがとうございます。そして、奇々怪界ファンの方々は楽しんでもらえたでしょうか？小説と言えば後書きが付きものなので、この作品について軽く書かせていただきます。

奇々怪界は初作品が出てから既に二十年経ったもので、移植も含めて多くの作品を世に出しています。一番最近に発売したものが２００１年なので、タイトル自体を知らない人も多いでしょう。

奇々怪界の小夜がモデルとなった登場人物が存在する作品もあり、そういう意味でも有名な作品と言えます。

この作品を書く際に一番苦慮したものは、既存の登場人物の見た目や性格の決定でした。

奇々怪界は昔の作品に加えてアクションゲームだけあり、登場人物の設定が最低限ついているだけで、肉付けが施されていません。魔奴化は見た目や話し方が特徴的で分かりやすいのですが、その他は別です。小夜は各作品の絵から受ける印象が各々で違い、美紀については彼女の色違いの絵で、簡単な設定しか存在しない状態です。本編を読んだ後で後書きに目を通した方は、美紀以上に設定が薄い登場人物にも気づいていると思います。

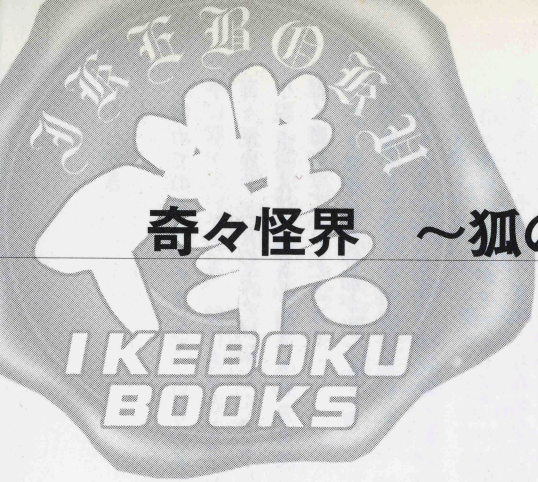
つまり、ファンの数だけ別の肉付けが施された登場人物が存在しているため、小夜や美紀は特に気を使う必要がありました。二人の立ち位置を決めて、できる限り近づけるように書かせてもらいましたが、既存のファンの方々に満足していただければ、これに勝る幸せはありません。

今作の『狐の里入り』にはオリジナルの登場人物が存在します。名無しも含めれば一人ではありませんが、小夜や美紀と共に話の主軸となる女の子です。七福神を祀る神社に加わる新たな一人として、皆さんに受け入れてもらえるように書かせていただきました。できることなら可愛がってやってください。

この作品は自分が筆を執った初めての小説となりますが、奇々怪界という無色に近い世界観に一つの色が加わりました。これが皆さんに認められて、一つの補完になってくれれば嬉しいです。贅沢を言えば、好評を博してもう一作……なんてことになれば狂喜乱舞いたします。

では、長々しくなりましたが、後書きはこれにて終わります。何度も日本を救った巫女たちの、ほんの少しほんわかとする幕間劇を読んでいただき、誠にありがとうございました。

著者　藤原休樹ｗｉｔｈ企画屋



奇々怪界　～狐の里入り～

2010年4月1日初版発行

原作　TAITO

企画編集　いけ僕制作委員会
執筆　藤原休樹 with 企画屋

発行人　河出岩夫
発行所　有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024
東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル1F
電話：03（3865）7778
FAX：03（3865）7779

発売　株式会社星雲社
〒112-0012
東京都文京区大塚3-21-10
電話：03（3947）1021
FAX：03（3947）1617

印刷製本　中央精版印刷株式会社

©TAITO CORPORATION 1986,2009
©いけ僕制作委員会　2010Printed in Japan
乱丁・落丁本はお取替えいたします。
本書の内容を無断で複製・転載することを禁じます。
ISBN978-4-434-14364-9

9784434143649

1920076007804

ISBN978-4-434-14364-9

C0076 ¥780E

定価 本体780円 +税

発行/ハーヴェスト出版

発売/星雲社

Illustration

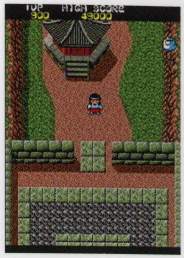
ひづき夜宵

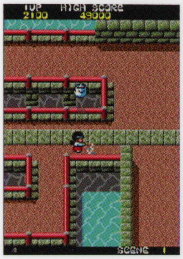
難波久美

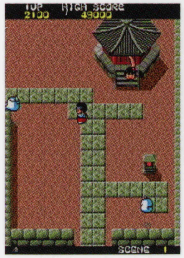
南向春風

冬式未来

（順不同）







季節は秋。
無数に舞い散る紅葉の中、七福神に仕える巫女、小夜は何事もない日常を謳歌していた。
だがある日、朝餉から戻った小夜が目にしたものは、大量の落葉によって覆い隠された神社の姿だった。超自然的でかつ人為的なその光景に小夜はもとより、見習いの美紀も呆然と立ち尽くすばかりだった……。
ゲームの登場から二十四年。そんな大掛かりな秋の悪戯から始まる、小さくも大きな成長の物語をお届けします。

奇々怪界 ～狐の里入り～

藤原休樹

with企画屋

ハーヴェスト